



～旬な村人にインタビュー～

村人



今回のピックアップ村人は、

渡邊桂亮さん（白石・71歳）

村の猟友会に属し、年間120〜130頭の鹿やイノシシをハントする凄腕猟師さんです。また、天然100%のはちみつ作りやミツバチの吸う花き（ミツバツツジ、またの名を「ムラサキツツジ」）の植樹も、家の裏山で行っています。

最近では、県の委託により秩父高原牧場のポピーを守るため、ポピー畑の鹿の駆除等も行ったたり、有害鳥獣駆除、大木の伐採など、何でも出来る真の「何でも屋さん」と言えます。埼玉県町村会の記念誌にも紹介された渡邊さんの内心に迫っていきたく思います！

鳥獣ハンターとして村とどのように関わっていますか？

自分は、村のお年寄りの健康を守っているんだと思うよ。自分がいなかったら村中、鹿やイノシシでいっぱいになる。そうすると畑の作物が荒らされ、食べ尽くされて、みんなが百姓をやる気がなくなる。そうになったらみんな百姓を辞め、家に引きこもるようになる。家に閉じこもってれば体を使わなくなり、不健康になる。だから、自分は村のお年寄りの健康のためにハンターをしているんだ。「自分がいるからお年寄りも元気になる」、まさに「風が吹けば桶屋が儲かる」と同じだね。そう考えると、俄然やる気が出るし、これからもみんなのために頑張っていきたいと思ってるよ。

今後、村や住民の皆さんにわかってほしいこと、期待することはありますか？

村の鳥獣駆除は、村民の皆さんの協力あってこそだ。自分ひとりの力は微々たるもの、みんなの理解がないとできない。「協同」が大切だよ。罾を置かせてもらう理解や、有害鳥獣が車に引かれていた場合の速やかな通報など、協力し合って村の「生活の健康」を守っていきたく自分分は思っているね。

最後に一言、皆さんに伝えたいことをお願いします！

今の深刻な問題は跡取りがないこと。後を継ぐ人をどのように育てるか、今後の課題だ。興味がある人、お年寄りの健康を支えたい人は名乗り出てほしい。若い力が今の村の狩猟には必要だ。現代は文明が発達してスマホやネットに個々で閉じこもり、人々の関係が閉鎖してしまっている。その中で、外に出て、人を助ける楽しみを知ってほしい。



▶自宅の裏山一面に咲き誇るミツバツツジ、道を挟んで反対側には桜の花。そしてもうすぐ菜の花も開花することです。

「俺の自慢だ」と、笑顔で紹介してくれました。また、上部の写真は仕留められた鹿の角と一緒に写真をとらせていただきました。渡邊さんの今後の活躍に皆さんご期待ください！